

2022・3・7【角2022B】選7句

17行3段組14ボ 2022年3月7日 11:30 ~1~ 桐9

山々に朝の挨拶初夏の風

トタン張りの雨戸に鏽や梅雨深し

平和島西白が差して平和なり

身の丈の長きを嘆くくもなはも

身の丈を人に憎まれ打たれ蛇

ゴジラ今は地球の味方寒桜

猫鳴といふはなけれど初日の出

20
22 · 4 · 29
【角2022a】選19句

12行3段組14点
2022年4月29日
07:26
^1<桐9

春昼の天氣予報にうとうと

木枯を切り分けてゐる風見鶏

東風吹かば鷄冠高く風見鷄

弱火にて今日もことこと冬籠

ぶらんこに靴を飛ばして足長き

~~葱の根のところ大事や食はねども~~

~~花咲けば風の洗礼夏はじめ~~

ちよび髪の葱の根大事食はねども

~~山々に朝の挨拶初夏の風~~

ゴジラ今は地球の味方寒桜

~~トタン張りの雨戸に鏽や梅雨深し~~

鶏鳴に代へて猫鳴く初日の出

~~平和島西日が差して平和なり~~

年玉の袋なめたりしやぶりつたり

~~身の丈の長きを嘆くくちなはも~~

キレイな代りにしゃがみ立てる
4.29

~~身の丈を人に憎まれ打たれ蛇~~

卷之三

青葉若葉大いに揺れを楽しめり

一粒で二度美味しいぞ花は葉に

卷之五

へうたんの瞑目つづく庵かな

日記 二〇四

2022・5・16 【角川俳句賞2022 プランA】 選14句

12行3段組14ボ 2022年5月16日 13:22 ^1 桐9

春昼の天氣予報にうとうとと

ちよび髭の葱の根大事食はねども

東風吹かば鶏冠高く風見鶏

鶏鳴に代へて猫鳴く初日の出

ぶらんこに靴を飛ばして足長き

ティアラして夜店を帰るお姫様

やや小さき墓の來てゐる今年かな

青葉若葉大いに揺れを楽しめり

一粒で二度美味しいぞ花は葉に

星一つ流れ落ちたる陰陽師

~~へうたんの~~ 暝目つづく庵かな

木枯を切り分けてゐる風見鶏

ことことと弱火のちから冬籠

落葉も餃子の羽も焦茶色

5.16

5.16

5.16

春~~昼~~の天気予報にうとうとと

東風吹かば鶏冠高く風見鶏

ティアラして夜店を帰るお姫様

女の子

色と香と煙と声の夜店かな

灯

夜店への道とはれて来たものの
やや小さき墓の来てゐる今年かな

一粒で二度美味しいぞ花は葉に

星一つ流れ落ちたる陰陽師

木枯を切り分けてゐる風見鶏

ことことと弱火のちから冬籠

ちよび髭の葱の根大事食はねども

鶏鳴に代へて猫鳴く初日の出

のなくこ

2022・5・17

【角川俳句賞2022 プランA 全64】 選15句

5.17
イント、18'11'10'

東風吹かば鶏冠高く風見鶏

ことことと弱火のちから冬籠

畠打の仕上げを雷に託しけり

ちよび髭の葱の根大事食はねども

雷激しプール毛羽立ち始めけり

鶏鳴に代へて猫鳴く初日の出

湯の町に何の遺恨か雷激し

日々に日のか

ティアラして夜店を帰る女の子

湯の宿に近所で飲んで豪印

色と香と煙と声と夜店の灯

りよ至ればお江戸の初夜とも

夜店への道と言はれて来たもの

泊方届く

鯵フライ食へり文明開化せよ

12行3段組14ポ
2022年5月17日 11:38 ↑1 桐9

やや小さき墓の來てゐる今年かな

星一つ流れ落ちたる陰陽師

一粒で二度美味しいぞ花は葉に

木枯を切り分けてある風見鶏

星一つ流れ落ちたる陰陽師

木枯を切り分けてある風見鶏

木枯を切り分けてある風見鶏

木枯を切り分けてある風見鶏

2022・5・17 -2

【角川俳句賞2022 プランA 全76】 選19句

12行3段組14ポ
2022年5月17日 19:47
↑1 桐9

東風吹かば鶏冠高く風見鶏 平凡に朝は茄子もぎ胡瓜もぎ
畠打の仕上げを雷に託しけり 星一つ流れ落ちたる陰陽師
湯の町に何の遺恨か雷激し 木枯に長身瘦躯風見鶏
雷激しプール毛羽立ち始めけり ことことと弱火のちから冬籠
ティアラして夜店を帰る女の子 山の湯に毎朝届く寒卵
夜店への道と言はれて来たものの ちよび髭の葱の根大事食はねども
色と香と子らの歓声夜店の灯 鶏鳴に代へて猫鳴く初日の出
梅干して玉は拳となりにけり いふなれば朝顔市の朝寝とも
鰯フライこれぞ文明開化なり やや小さき墓の来てゐる今年かな
一粒で二度美味しいぞ花は葉に

2022・5・17 【角川俳句賞2022 プランA 全99】 選30句

12行3段組14ボ 2022年5月17日 20:29 ~1~ 桐9

こし夜にも星降る夜の

星一つ流れ落ちたる陰陽師

木枯に長身瘦躯風見鶏

かげろあや見ると言ふ字に足一本
東風吹かば鷄冠高く風見鶏

煙打の仕上げを雷に託しけり

四十・五・六十余年昭和の日

ひよろひよろと白髭伸びて脚蹠枯る

四十・五・六十余年昭和の日

指差呼称して半袖の運転手

山の湯に毎朝届く寒卵

湯の町に何の遺恨か雷激し

梅干して玉は拳となりにけり

ちよび髭の葱の根大事食はねども

雷激し澎湃^{別体に夜く下や雷激し}

いふなれば朝顔市の朝寝とも

鷄鳴に代へて猫鳴く初日の出

雷激し澎湃^{別体に夜く下や雷激し}

鯉フライこれぞ文明開化なり

やや小さき墓の來てゐる今年かな

赤に黄に傘や合羽や梅雨樂し

一粒で二度美味しいぞ花は葉に

やめづよく歌ふことより

荒梅雨に袋ぶら下げランドセル

青空に憧れて徽青むなり

よきよく歌ふことより

風死してピクリともせぬ暑さかな

平凡に朝は茄子もぎ胡瓜もぎ

よきよく歌ふことより

夕焼に四角く赤きポストかな
なかんづくおでこの汗の光るなり

松葉牡丹咲き継ぐ種を零しつつ

よきよく歌ふことより

東風吹かば鶏冠高く風見鶏 雷の渡り廊下を給食が 山の湯に毎朝届く寒卵
 煙打の仕上げを雷に託しけり 平凡に朝の胡瓜をもぎ取りて

四十・五十・六十余年昭和の日 鮓フライこれぞ文明開化なり やや小さき墓の来てゐる今年かな
 ひよろひよろと白髭伸びて脚觸枯る 夜店かな狐の面でわざとる

一粒で二度美味しいぞ花は葉に 青空に憧れて黒青むなり どの店の狐の面の夜店かな
 赤に黄に傘や合羽や梅雨樂し テイアラして夜店を帰る女の子 ちよび髭の葱の根大事食はねども
 荒梅雨に袋ぶら下げランドセル 松葉牡丹咲き継ぐ種を零しつつ ことことと弱火のちから冬籠
 指差呼称して半袖の運転手 こんなにも星降る夜の陰陽師 木枯を切り分けてゐる風見鶏
 基平や見ると言ふ字に足二本 風死してピクリともせぬ暑さかな ちよび髭の葱の根大事食はねども
 風死してピクリともせぬ暑さかな なかんづくおでこの汗の光るなり ことことと弱火のちから冬籠
 梅干して玉は礫となりにけり 猫のよく眠ることよの初日の出 一ネネナ 5.17
 年の瀬の占師 5.17

2022・5・19 【角川俳句賞2022 プランA 全126】 選24句

12行3段組14ポ 2022年5月19日 20:18 ~桐9

東風吹かば鶏冠高く風見鶏

鰯フライこれぞ文明開化なり

日々に文明開化努力

畠打の仕上げを雷に託しけり

ティアラして夜店を帰る女の子

四十・五十・六十余年昭和の日

帰り道暗し夜店を振り返る

ひよろひよろと白髭伸びて躊躇枯る

やや小さき墓の來てゐる今年かな

一粒で二度美味しいぞ花は葉に

青空に憧れて徽青むなり

赤に黄に傘や合羽や梅雨樂し

松葉牡丹咲き継ぐ種を零しつつ

荒梅雨の袋ぶら下げランドセル

こんなにも星降る夜の陰陽師

指差呼称して半袖の運転手

木枯を切り分けてゐる風見鶏

風死してピクリともせぬ暑さかな

ちよび髭の葱の根大事食はねども

梅干して玉は礫となりにけり

ことことと弱火のちから冬籠

雷の渡り廊下を給食が

猫のよく眠ることよの初日の出

胡瓜もぐ朝な朝なぞもぎ尽くす

山の湯に毎朝届く寒卵

2022・5・20 【角川俳句賞2022 プランA 全16】 選31句

→40句

12行3段組14拍 2022年5月20日 23:45 ^1~桐9

東風吹かば鶏冠高く風見鶏

茄子をもぐ朝な朝なにもぎ尽くす

松葉牡丹咲き継ぐ種を零しつつ

畠打の仕上げを雷に託しけり

東京で見かけし電車夏の山

こんなにも星降る夜の陰陽師

四十・五十・六十余年昭和の日

指差呼称して半袖の運転手

木枯を切り分けてゐる風見鶏

ひよろひよろと白髭伸びて脚躅枯る

風死してピクリともせぬ暑さかな

ちよび髭の葱の根大事食はねども

一粒で二度美味しいぞ花は葉に

炎天の足下に焦げて影小さし

ことことと弱火のちから冬籠

橙も金柑も咲き蜜柑山

雷の渡り廊下を給食が

猫のよく眠ることよの初日の出

幼子の匙より零れ豆ごはん

梅干して玉は礫となりにけり

山の湯に毎朝届く寒卵

赤に黄に傘や合羽や梅雨楽し

鯰フライ文明開化の味がする

珍事方々やけに!

荒梅雨の袋ぶら下げランドセル

一式の夜店を積んで来りけり

をかりけり

青梅の硬きがままに太るなり

ティアラして夜店を帰る女の子

をかりけり

枇杷の種ほどの俳句も良からずや

帰り道暗し夜店を振り返る

をかりけり

青空に憧れて黴青むなり

やや小さき墓の來てゐる今年かな

をかりけり

トトロ

東風吹かば鶏冠高く風見鶏
畠打の仕上げを雷に託しけり
みるならばぼうとみたき桜かな
四十・五十・六十余年昭和の日
ひよろひよろと白髭伸びて脚躅枯る
一粒で二度美味しいぞ花は葉に
橙も金柑も咲き蜜柑山
庭干しの鰯の開きを今朝も食ふ
幼子も匙を器用に豆ごはん
赤に黄に傘や合羽や梅雨楽し
荒梅雨の袋ぶら下げランドセル
青梅の硬きがままに太るなり

枇杷の種ほどの俳句も良からずや
青空に憧れて黒青むなり
茄子をもぐ朝な夕なにもぎ尽くす
東京で見かけし電車夏の山
指差呼称して半袖の運転手
風死してピクリともせぬ暑さかな
こんなにも星降る夜の陰陽師
木枯を切り分けてゐる風見鶏
ちよび髭の葱の根大事食はねども
ことことと弱火のちから冬籠
山の湯に毎朝届く寒卵

ティアラして夜店を帰る女の子
帰り道暗し夜店を振り返る
天道虫水母に化する余生かな
やや小さき墓の来てゐる今年かな
松葉牡丹咲き継ぐ種を零しつつ
扇風機除湿機空気清浄機
鰯フライ文明開化の味がする
一式の夜店を積んで来りけり

東風吹かば鶏冠高く風見鶏 青空に憧れて黴青むなり
 番打の仕上げを雷に託しけり 茄子をもぐ朝な夕なにもぎ尽くす
 みるならばぼうつとみたき桜かな 庭干しの鰯の開きを今朝も食ふ
 四十・五十・六十余年昭和の日 東京で見かけし電車夏の山
 ひよろひよろと白ひげ伸びて躊躇枯る 指差呼称して半袖の運転手
 一粒で二度美味しいぞ花は葉に 風死してピクリともせぬ暑さかな
 橙も金柑も咲き蜜柑山 炎天の足下に焦げて影小さし
 幼子も匙を器用に豆ごはん 地の涯に天を支へて花氷
 赤に黄に傘や合羽や梅雨楽し 道端の草もずぶ濡れ撒水車
 荒梅雨の袋ぶら下げランドセル 扇風機除湿機空氣清淨機
 青梅の硬きがままに太るなり 雷の渡り廊下を給食が
 枇杷の種ほどの俳句も良からずや 鮓フライ文明開化の味がする

肉を焼く煙に喫せて夏の月
 一式の夜店を積んで来りけり
 ティアラして夜店を帰る女の子
 帰り道暗し夜店を振り返る
 ががんばのやうな人生かも知れず
 火蛾と言ふ美しき名の太り肉
 通ひ路の雨を厭はず火取虫
 子燕の喉に押し込む蜻蛉かな
 天道虫水母に化する余生かな
 やや小さき墓の來てゐる今年かな
 蝅を取る道具色々郷土館
 松葉牡丹咲き継ぐ種を零しつつ

2022・5・21 【角川俳句賞2022 プランA 全206】 選43句

12行3段組14ボ 2022年5月21日 12:25 ^2~桐9

外~~つ~~國の火薬の匂ひ庭花火

湖の深き暗がり遠花火

こんなにも星降る夜の陰陽師

木枯を切り分けてゐる風見鶏

ちよび髭の葱の根大事食はねども

ことことと弱火のちから冬籠

山の湯に毎朝届く寒卵

まむく
とまけとまぼの甲冑かな 梅雨の日又梅雨の意(の)

と甲冑となせり解か走る

タミに後三つ年となりけん

タミやとこモ太き丘立本場

さす傘が水の半升のツミか瓦

やうをひそむ

タミ泥りりし

かき泥武

ひき毛子の半升の主れ梅雨深し

雪行入梅雨の日々

2022・5・21【角川俳句賞2022 プランA 全215】選42句

12行3段組14ボ 2022年5月21日 21:26 ^1~桐9

東風吹かば鶏冠高く風見鶏
雛様に珈琲苦し我が飲む
畠打の仕上げを雷に託しけり
美しき彼岸の夜道たどるなり
みるならばぼうつとみたき桜かな
四十・五十・六十余年昭和の日
ひよろひよろと白ひげ伸びて躊躇枯る
一粒で二度美味しいぞ花は葉に
橙も金柑も咲き蜜柑山
幼子も匙を器用に豆ごはん
赤に黄に傘や合羽や梅雨楽し
荒梅雨の袋ぶら下げランドセル

枇杷の種ほどの俳句も良からずや
青空に憧れて黒青むなり
茄子をもぐ朝な夕なにもぎ尽くす
庭干しの鱸の開きを今朝の幸
東京で見かけし電車夏の山
風死してピクリともせぬ暑さかな
炎天の足下に焦げて影小さし
地の涯に天を支へし花氷
道端の草もずぶ濡れ撒水車
扇風機除湿機空気清浄機
雷鳴の渡り廊下を給食が
餃フライ文明開化の味がする
肉を焼く煙に噎せて夏の月
トラックに夜店一式を積んで来し
ティアラして夜店を帰る女の子
帰り道暗し夜店を振り返る
ががんばのやうな人生かも知れず
火蛾と言ふ美しき名の太り肉
通ひ路の雨を厭はず火取虫
子燕の喉に押し込む蜻蛉かな
天道虫海月に化する余生かな
やや小さき墓の来てゐる今年かな
蠅を取る道具色々郷土館
松葉牡丹ひそかに種を零しつつ

2022・5・21【角川俳句賞2022 プランA 全215】選42句

12行3段組14ボ
2022年5月21日 21:26 ^2 v桐9

湖の深き暗がり遠花火

こんなにも星降る夜の陰陽師

木枯を切り分けてゐる風見鶏

ちよび髭の葱の根大事食はねども

ことことと弱火のちから冬籠

山の湯に毎朝届く寒卵

2022・5・22 【角川俳句賞2022 プランA 全222】 選45句

内卷113
新版本
序章
桐9

やや小さき墓の來てゐる今年かな

蠅を取る道具色々郷土館

松葉牡丹ひそかに種を零しつつ

湖の深き音がり遠花火

卷之三

卷之三

木枯を切り分けてゐる風見鶏

ちよび髭の葱の根大事食はねども

ことことと弱火のちから冬籠

山の湯に毎朝届く寒卵

九月一號

卷之二

loop ($12 \times 10^{\frac{L}{2}}$
center $12 \times 12 \text{ rect}$

おしさに自信の末の大雪崩

流氷下にモレテ在ヌオキツク
思ひ事と希望ニシモゴト

卷之三

自重して白毛の墨の西山川太瓦

夏雲の匂ひの拂去

自 < 脳 < 痘

白山日記

卷之三

卷之三

卷之二

卷之三

卷之三

くもやのひごとに春の花

如人清巾

うすうきうひの水たまり

遠足の園児思へばそれだけで　東風吹かば鶏冠高く風見鶏
 なつかしきもののひとつに春の泥　雛様に珈琲苦し我が飲む
 橙も金柑も咲き蜜柑山　赤に黄に傘や合羽や梅雨樂し
 風死してピクリともせぬ暑さかな
 幼子も匙を器用に豆ごはん　炎天の足下に焦げて影小さし
 地の涯に天を支ふる花氷　扇風機除湿機空氣清淨機
 番打の仕上げを雷に託しけり　荒梅雨の袋ぶら下げランドセル
 枇杷の種ほどの俳句も良からずや　雷鳴の渡り廊下を給食が
 大いなる自重の末の大雪崩　青空に憧れて黒青むなり
 うすらひのうすらわらひのことく消ゆ　どうどうと滝の重みの夕立かな
 茄子をもぐ朝な夕なにもぎ尽くす　夕立にとても大きな駐車場
 美しき夜道を帰る彼岸かな　道端の草もずぶ濡れ撒水車
 庭干しの鯉の開きを今朝の幸　鯉フライ文明開化の味がする
 みるならばぼうとみたき桜かな　肉を焼く煙に噎せて夏の月
 四十・五十・六十余年昭和の日　軽トラに夜店一式積み込んで
 ひよろひよろと白ひげ伸びて躊躇枯る　ティアラして夜店を帰る女の子
 一粒で二度美味しいぞ花は葉に　空母とも言ふべき雲や夏の空
 帰り道暗し夜店を振り返る

2022・5・23 【角川俳句賞2022 プランA 全254】 選52句

12行3段組14ボ 2022年5月23日 07:59 ^2 桐9

火蛾と言ふ美しき名の太り肉 ちよび髭の葱の根大事食はねども
通ひ路の雨を厭はず火取虫 ことことと弱火のちから冬籠
ががんばのやうな人生かも知れず 怪獣のよく出ることよお正月
子燕の喉に押し込む蜻蛉かな 山の湯に毎朝届く寒卵
天道虫海月に化する余生かな やや小さき墓の来てゐる今年かな
やや小さき墓の来てゐる今年かな
蠅を取る道具色々郷土館
あかあかと死の静けさの蟻地獄
松葉牡丹ひそかに種を零しつつ
湖の闇の深さよ遠花火
こんなにも星降る夜の陰陽師
木枯を切り分けてゐる風見鶏

花 水 20 22 25 23

東風吹かば鶏冠高く風見鶏

雛様に珈琲苦し我が飲む

畠打の仕上げを雷に託しけり

大いなる自重の末の大雪崩

うすらひのうすらわらひの^に~~は~~^いとく消ゆ

美しい夜道を帰る彼岸かな （見えんこうがた）

がるなつばぼうのこひでを歌ひなす

四十・五十・六十余年留印の日

ひ よ ろ ひ よ ろ と 白 ひ げ 伸 び て 鄭 獬 枯 る

一粒で二度美味しいぞ花は葉に

燈も金柑も咲き蠻柑山

幼子も匙を器用に豆一一はん

赤こ黄こ傘や合羽や梅雨樂し

荒 梅 雨 の 袋 が つ 下 ザ フ ァ ン ド を ル

此巴の重ほがの非可も良かつばを

青空にて董ルにて徵青ルの

苗子立つゝ明る夕はての残風に

延喜ノ參の開港と奈良朝の華

道端の草もずぶ濡れ撒水車
東京で見かけし電車夏の山
夏雲の白さ眩しさ高さかな
空母とも言ふべき雲~~や~~夏の空
風死してピクリともせぬ暑さかな
炎天の足下に焦げて影小さし
地の涯に天を支ふる花氷
扇風機除湿機空気清浄機
雷鳴の渡り廊下を給食が
どうどうヒヤの重みのタ立かな

タ立にとても大きな駐車場
鰯フライ文明開化の味がする
肉を焼く煙に喧せて夏の月
軽トラに夜店一式積み込んで
ティアラして夜店を帰る女の子
帰り道暗し夜店を振り返る
火蛾と言ふ美しき名の太り肉
通ひ路の雨を厭はず火取虫
ががんばのやうな人生かも知れず
子燕の喉に押し込む蜻蛉かな

天道虫海月に化する余生かな
やや小さき墓の来てゐる今年かな
蠅を取る道具色々郷土館
あかあかと死の静けさの蟻地獄
松葉牡丹ひそかに種を零しつつ
湖の闇の深さよ遠花火
こんなにも星降る夜の陰陽師
木枯を切り分けてゐる風見鶏
ちよび髭の葱の根大事食はねじも
ことことと弱火のちから冬籠

怪獣のよく出ることよお正月
山の湯に毎朝届く寒卵

東風吹かば鶏冠高く風見鶏
 雛様に珈琲苦し我が飲む
 番打の仕上げを雷に託しけり
 大いなる自重の末の大雪崩
 うすらひにうすらわらひもありぬべし
 美しき夜道を帰る彼岸かな
 四十・五十・六十余年昭和の日
 ひよろひよろと白ひげ伸びて躄躅枯る
 一粒で二度美味しいぞ花は葉に
 橙も金柑も咲き蜜柑山
 幼子も匙を器用に豆ごはん

赤に黄に傘や合羽や梅雨樂し
 荒梅雨の袋ぶら下げランドセル
 枇杷の種ほどの俳句も良からずや
 青空に憧れて徽青むなり
 茄子をもぐ朝な夕なにもぎ尽くす
 庭干しの鯵の開きを今朝の幸
 道端の草もずぶ濡れ撒水車
 東京で見かけし電車夏の山
 夏雲の白さ眩しさ高さかな
 空母とも言ふべき雲が夏の空
 風死してピクリともせぬ暑さかな
 帰り道暗し夜店を振り返る
 テイアラして夜店を帰る女の子
 火蛾と言ふ美しき名の太り肉
 通ひ路の雨を厭はず火取虫

ががんばのやうな人生かも知れず

怪獣のよく出ることもお正月

子燕の喉に押し込む蜻蛉かな

山の湯に毎朝届く寒卵

残生は海月に化する天道虫

やや小さき墓の来てゐる今年かな

蠅を取る道具色々郷土館

あかあかと死の静けさの蟻地獄

松葉牡丹ひそかに種を零しつつ

湖の闇の深さよ遠花火

こんなにも星降る夜の陰陽師

木枯を切り分けてゐる風見鶏

ちよび髭の葱の根大事食はねども

ことことと弱火のちから冬籠

2022・5・24 【角2022 花氷】

選50句

17行3段組14ボ 2022年5月24日 12:57 1 桐9

もとくす那方のあそぶ

東風吹かば鶏冠高く風見鶏
雛様に珈琲苦し我が飲む
畠打の仕上げを雷に託しけり
大いなる自重の末の大雪崩
うすらひにうすらわらひもありぬべし
美しき夜道を帰る彼岸かな
みるならばぼうとみたき桜かな
四十・五十・六十余年昭和の日
ひよろひよろと白ひげ伸びて躊躇枯る
一粒で二度美味しいぞ花は葉に
橙も金柑も咲き蜜柑山
幼子も匙を器用に豆ごはん
赤に黄に傘や合羽や梅雨楽し
荒梅雨の袋ぶら下げランドセル
枇杷の種ほどの俳句も良からずや
青空に憧れて徽青むなり
茄子をもぐ朝な夕なにもぎ尽くす

庭干しの鯉の開きを今朝の幸
道端の草もずぶ濡れ撒水車
東京で見かけし電車夏の山
夏雲の白さ眩しさ高さかな
空母とも言ふべき雲が夏の空
風死してピクリともせぬ暑さかな
炎天の足下に焦げて影小さし
地の涯に天を支ふる花氷
扇風機除湿機空氣清淨機
雷鳴の渡り廊下を給食が
どうどうと滝の重みの夕立かな
夕立にとても大きな駐車場
餃フライ文明開化の味がする
肉を焼く煙に噎せて夏の月
軽トラに夜店一式積み込んで
ティアラして夜店を帰る女の子
山の湯に毎朝届く寒卵

火蛾と言ふ美しき名の太り肉
通ひ路の雨を厭はず火取虫
ががんばのやうな人生かも知れず
子燕の喉に押し込む蜻蛉かな
残生は海月に化する天道虫
やや小さき墓の来てゐる今年かな
蠅を取る道具色々郷土館
あかあかと死の静けさの蟻地獄
松葉牡丹ひそかに種を零しつつ
湖の闇の深さよ遠花火
こんなにも星降る夜の陰陽師
木枯を切り分けてゐる風見鶏
ちよび髭の葱の根大事食はねども
ことことと弱火のちから冬籠
怪獣のよく出ることもお正月

東風吹かば鶏冠高く風見鶏
雛様に珈琲苦し我が飲む
畠打の仕上げを雷に託しけり
大いなる自重の末の大雪崩
うすらひのうすらわらひの水たまり
美しき夜道を帰る彼岸かな
みるならばぼうとみたき桜かな
四十・五十・六十余年昭和の日
ひよろひよろと白ひげ伸びて躊躇枯る
一粒で二度美味しいぞ花は葉に
橙も金柑も咲き蜜柑山
幼子も匙を器用に豆ごはん
赤に黄に傘や合羽や梅雨楽し
荒梅雨の袋ぶら下げランドセル
枇杷の種ほどの俳句も良からずや
青空に憧れて徽青むなり
もぎ尽くす朝な夕なの茄子なり

^{ウエ2句}
庭干しの鰯の開きを今朝の幸
道端の草もずぶ濡れ撒水車
東京で見かけし電車夏の山
夏雲の白さ眩しさ高さかな
空母とも呼ぶべき雲が夏の空
風死してピクリともせぬ暑さかな
炎天の足下に焦げて影小さし
地の涯に天を支ふる花氷
^{扇風機除湿機空気清浄機}
雷鳴の渡り廊下を給食が
どうどうと滝の重みの夕立かな
夕立にとても大きな駐車場
鰯フライ文明開化の味がする
肉を焼く煙に噎せて夏の月
軽トラに夜店一式積み込んで
ティアラして夜店を帰る女の子
帰り道暗し夜店を振り返る

火蛾と言ふ美しき名の太り肉
ががんばのやうな人生かも知れず
子燕の喉に押し込む蜻蛉かな
残生は海月に化する天道虫
やや小さき墓の來てゐる今年かな
蠅を取る道具色々郷土館
あかあかと死の静けさの蟻地獄
松葉牡丹ひそかに種を零しつつ
湖の闇の深さよ遠花火
~~みんなにも星降る夜の陰陽師~~
木枯を切り分けてゐる風見鶏
~~ちよび髭の葱の根大事食はねども~~
ことことと弱火のちから冬籠
怪獣のよく出ることもお正月
山の湯に毎朝届く寒卯

東風吹かば鶏冠高く風見鶏
雛様に珈琲苦し我が飲む
畠打の仕上げを雷に託しけり
大いなる自重の末の大雪崩
うすらひのうすらわらひの水たまり
美しき夜道を帰る彼岸かな
みるならばぼうとみたき桜かな
四十・五十・六十余年昭和の日
ひよろひよろと白ひげ伸びて脚枯る
一粒で二度美味しいぞ花は葉に
橙も金柑も咲き蜜柑山
幼子も匙を器用に豆ごはん
赤に黄に傘や合羽や梅雨樂し
荒梅雨の袋ぶら下げランドセル
枇杷の種ほどの俳句も良からずや
青空に憧れて徽青むなり
もぎ尽くす朝な夕なの茄子なり

下

庭干しの鯉の開きを今朝の幸
道端の草もずぶ濡れ撒水車
東京で見かけし電車夏の山
夏雲の白さ眩しさ高さかな
空母とも呼ぶべき雲が夏の空
風死してピクリともせぬ暑さかな
炎天の足下に焦げて影小さし
地の涯に天を支ふる花氷
虹の根の煎^洗葉は秘中の秘
~~黄泉の国へは金銀の虹の橋~~
扇風機除湿機空気清浄機
雷鳴の渡り廊下を給食が
どうどうと滝の重みの夕立かな
夕立にとても大きな駐車場
鰯フライ文明開化の味がする
肉を焼く煙に噎せて夏の月
軽トラに夜店一式積み込んで

テイアラして夜店を帰る女の子
帰り道暗し夜店を振り返る
火蛾と言ふ美しき名の太り肉
通ひ路の雨を厭はず火取虫
ががんばのやうな人生かも知れず
子燕の喉に押し込む蜻蛉かな
残生は海月に化する天道虫
やや小さき墓の來てゐる今年かな
蠅を取る道具色々郷土館
あかあかと死の静けさの蟻地獄
松葉牡丹ひそかに種を零しつつ
湖の闇の深さよ遠花火
木枯を切り分けてゐる風見鶏
ことことと弱火のちから冬籠
怪獣のよく出ることもお正月
山の湯に毎朝届く寒卯

東風吹かば鶏冠高く風見鶏
雛様に珈琲苦し我が飲む
畠打の仕上げは雷に託しけり
大いなる自重の末の大雪崩
うすらひのうすらわらひの水たまり
美しき夜道を帰る彼岸かな
みるならばぼうとみたき桜かな
四十・五十・六十余年昭和の日
ひよろひよろと白ひげ伸びて躊躇枯る
一粒で二度美味しいぞ花は葉に
橙も金柑も咲き蜜柑山モヤ
扇風機除湿機空気清浄機
虹が出て橋の下より拾はるる
地の涯に天を支ふる花氷
虹の根の漢方薬は秘中の秘
炎天の足下に焦げて影小さし
地の涯に天を支ふる花氷
残生は海月に化する天道虫
やや小さき墓の來てゐる今年かな
蠅を取る道具色々郷土館
あかあかと死の静けさの蟻地獄
松葉牡丹ひそかに種を零しつつ
湖の闇の深さよ遠花火
木枯を切り分けてゐる風見鶏
どうどうと滝の重みの夕立かな
夕立にとても大きな駐車場
鰯フライ文明開化の味がする
肉を焼く煙に噎せて夏の月
青空に憧れて黒青むなり
もぎ尽くす朝な夕なの茄子なり

庭干しの鰯の開きを今朝の幸
道端の草もずぶ濡れ撒水車
東京で見かけし電車夏の山
夏雲の白さ眩しさ高さかな
空母とも呼ぶべき雲が夏の空
風死してピクリともせぬ暑さかな
炎天の足下に焦げて影小さし
地の涯に天を支ふる花氷
虹が出て橋の下より拾はるる
地の涯に天を支ふる花氷
虹の根の漢方薬は秘中の秘
炎天の足下に焦げて影小さし
地の涯に天を支ふる花氷
残生は海月に化する天道虫
やや小さき墓の來てゐる今年かな
蠅を取る道具色々郷土館
あかあかと死の静けさの蟻地獄
松葉牡丹ひそかに種を零しつつ
湖の闇の深さよ遠花火
木枯を切り分けてゐる風見鶏
どうどうと滝の重みの夕立かな
夕立にとても大きな駐車場
鰯フライ文明開化の味がする
肉を焼く煙に噎せて夏の月
青空に憧れて黒青むなり
もぎ尽くす朝な夕なの茄子なり

東風吹かば鶏冠高く風見鶏
 雛様に珈琲苦し我が飲む
 煙打の仕上げは雷に託しけり
 大いなる自重の末の大雪崩
 うすらひのうすらわらひの水たまり
 美しき夜道を帰る彼岸かな
 みるならばぼうとみたき桜かな
 四十・五十・六十余年昭和の日
 ひよろひよろと白ひげ伸びて躊躇枯る
 一粒で二度美味しいぞ花は葉に
 橙も金柑も咲き蜜柑もや
 幼子も匙を器用に豆ごはん
 赤に黄に傘や合羽や梅雨樂し
 荒梅雨の袋ぶら下げランドセル
 枇杷の種ほどの俳句も良からずや
 青空に憧れて徽青むなり
 もぎ尽くす朝な夕なの茄子なり

庭干しの鰯の開きを今朝の幸
 道端の草もずぶ濡れ撒水車
 東京で見かけし電車夏の山
 夏雲の白さ眩しさ高さかな
 空母とも呼ぶべき雲が夏の空
 風死してピクリともせぬ暑さかな
 炎天の足下に焦げて影小さし
 地の涯に天を支ふる花氷
 雷は雨と田んぼや微笑まし
 虹が出て橋の下より拾はるる
 雷鳴の渡り廊下を給食が
 虹の根は万病に効く秘薬とぞ
 扇風機除湿機空気清浄機
 どうどうと滝の重みの夕立かな
 夕立にとても大きな駐車場
 鯉フライ文明開化の味がする
 肉を焼く煙に噎せて夏の月

軽トラに夜店一式積み込んで
 テイアラして夜店を帰る女の子
 帰り道暗し夜店を振り返る
 火蛾と言ふ美しき名の太り肉
 通ひ路の雨を厭はず火取虫
 ががんばのやうな人生かも知れず
 子燕の喉に押し込む蜻蛉かな
 残生は海月に化する天道虫
 やや小さき墓の来てゐる今年かな
 蠼を取る道具色々郷土館
 松葉牡丹ひそかに種を零しつつ
 湖の闇の深さよ遠花火
 木枯を切り分けてゐる風見鶏
 ことことと弱火のちから冬籠
 怪獸のよく出ることもお正月
 山の湯に毎朝届く寒卵

東風吹かば鶏冠高く風見鶏
 雛様に珈琲苦し我が飲む
 番打の仕上げは雷に託しけり
 大いなる自重の末の大雪崩
 うすらひのうすらわらひの水たまり
 美しき夜道を帰る彼岸かな
 みるならばぼうとみたき桜かな
 四十・五十・六十余年昭和の日
 ひよろひよろと白ひげ伸びて躊躇枯る
 一粒で二度美味しいぞ花は葉に
 花蜜柑その他橙金柑も
 幼子も匙を器用に豆ごはん
 赤に黄に傘や合羽や梅雨楽し
 荒梅雨の袋ぶらぶらランドセル
 枇杷の種ほどの俳句も良からずや
 青空に憧れて微青むなり
 もぎ尽くすまでは茄子の畠なり

庭干しの鱈の開きを今朝の幸
 道端の草もずぶ濡れ撒水車
 東京で見かけし電車夏の山
 夏雲の白さ眩しさ高さかな
 空母とも呼ぶべき雲が夏の空
 風死してピクリともせぬ暑さかな
 炎天の足下に焦げて影小さし
 地の涯に天を支ふる花氷
 雷の字は雨と田んぼや微笑まし
 雷鳴の渡り廊下を給食が
 虹が出て橋の下より拾はるる
 虹の根を煎じて飲めと言はれけり
 扇風機除湿機空気清浄機
 どうどうと滝の重みの夕立かな
 夕立にとても大きな駐車場
 燬フライ文明開化の味がする
 肉を焼く煙に噎せて夏の月

軽トラに夜店一式積み込んで
 テイアラして夜店を帰る女の子
 帰り道暗し夜店を振り返る
 火蛾と言ふ美しき名の太り肉
 通ひ路の雨を厭はず火取虫
 ががんばのやうな人生かも知れず
 子燕の喉に押し込む蜻蛉かな
 恋ゆゑに海月となりし天道虫
 やや小さき蔓の來てゐる今年かな
 蟻を取る道具色々郷土館
 松葉牡丹ひそかに種を零しつつ
 湖の闇の深さよ遠花火
 木枯を切り分けてゐる風見鶏
 ことことと弱火のちから冬籠
 怪獸のよく出ることもお正月
 山の湯に朝な朝な寒卯

2022・5・28 【角川俳句賞2022】

プランA花氷全276 選50句

行3段組14ポ 2022年5月28日 22:13 ^1~桐9

オノミ
5
切10金

東風吹かば鶏冠高く風見鶏
雛様に珈琲苦し我が飲む
畠打の仕上けは雷に託しけり
大いなる自重の末の大雪崩
うすらひのうすらわらひの水たまり
美しき夜道を帰る彼岸かな
みるならばぼうとみたき桜かな
四十・五十・六十余年昭和の日
ひよろひよろと白ひげ伸びて躊躇枯る
一粒で二度美味しいぞ花は葉に
雷の字は雨と田んぼや微笑まし
虹が出て橋の下より拾はるる
幼子も匙を器用に豆ごはん
赤に黄に傘や合羽や梅雨樂し
荒梅雨の袋ぶらぶらランドセル
枇杷の種ほどの俳句も良からずや
青空に憧れて徽青むなり
もぎ尽くすまでは我家の茄子畠

庭干しの鯉の開きを今朝の幸
道端の草もずぶ濡れ撒水車
東京で見かけし電車夏の山
夏雲の白く眩しく美しく
空母とも呼ぶべき雲が夏の空
風死してピクリともせぬ暑さかな
炎天の足下に焦げて影小さし
地の涯に天を支ふる花氷
雷の字は雨と田んぼや微笑まし
虹が渡り廊下を給食が
雷鳴の渡り廊下を給食が
虹が出て橋の下より拾はるる
幼子も匙を器用に豆ごはん
赤に黄に傘や合羽や梅雨樂し
荒梅雨の袋ぶらぶらランドセル
枇杷の種ほどの俳句も良からずや
青空に憧れて徽青むなり
もぎ尽くすまでは我家の茄子畠

軽トラに夜店一式積み込んで
ティアラして夜店を帰る女の子
帰り道暗し夜店を振り返る
火蛾と言ふ美しき名の太り肉
通ひ路の雨を厭はず火取虫
ががんばのやうな人生かも知れず
子燕の喉に押し込む蜻蛉かな
恋ゆゑに海月となりし天道虫
やや小さき墓の来てゐる今年かな
蠅を取る道具色々郷土館
松葉牡丹ひそかに種を零しつつ
湖の闇の深さよ遠花火
木枯を切り分けてゐる風見鶏
ことことと弱火のちから冬籠
怪獸のよく出ることよお正月
山の湯に朝な朝なの寒卵

vs力